胆道系の病気について

都留市立病院外科　紫藤和久

胆道系というと少しわかりにくいかもしれませんが、主に胆嚢・胆管の病気です。胆嚢・胆管とは、おなかの右上あたりにある臓器で、肝臓で作られる胆汁の貯蔵庫であり、また通り道（肝臓から十二指腸の間）となっています。ですからここに異変がありますと、胆汁の排泄が悪くなり、血中にそれがたまり黄疸（皮膚や眼の白い部分が黄染する）という状態になりやすくなります。代表的な病気を二、三とりあげて述べてみようと思います。

1　胆石症

（胆嚢結石、胆管結石）

胆嚢結石……胆嚢の中に石ができている状態で、原因はいろいろなことが言われています。石の種類（構成成分、構造が違う）によって原因も違うようです。胆嚢結石で頻度が一番高いコレステロール結石は女性で太った方、高脂血症の方が多いようです。症状を有するものは約半数で、人間ドックや検診の超音波検査でたまたま発見される無症状胆石が年々増加しています。主な症状は心窩部（みぞおち）から右季肋部にかけての右

上背に放散する痛みです。痛みがでるのは（胆石発作と言いますが）脂肪分をとりすぎたり、暴飲暴食の後のことが多く、食後四～五時間の夜半のことが多いようです。自己判断で胃の痛みではないかと思っている方も多々いるかもしれません。症状は長く続かず一過性のことも多く、そのため医者にかからないでいる方もいるでしょう。ですが発作を繰り返しているうちに重篤な胆嚢炎・胆管炎を起こし生命を脅かすこともあります。ですから思いあたる方は一度は医療機関にかかることをお薦めします。検査としてはまず一般的なものとして腹部超音波（エコー）があります。これは痛くもかゆくもなく、全く苦痛のない検査で、また被爆とかの心配もない、体に無害なものです。最近この検査機器もかなり改良されており、得る情報も多くなりました。他の検査としては腹部CT、（直接もしくは間接）胆道造影などがあります。これらはどちらかというと精密検査の部類に属します。治療は非手術的治療と手術的治療があり、前者としては経口胆石溶解療法・体外衝撃波結石破砕療法が、後者として腹腔鏡的胆嚢摘出術・開腹下胆嚢摘出術があります。非手術療法では治らない（石がなくならない）タイプのもので症状がある方には手術を薦めています。症状のない方の場合でも希望があった時や六十歳以上の時は手術を行うことにします。なぜかというと高齢で胆石を保有した方は胆嚢炎を起こすことが多く、胆嚢癌の発生率が高くなる傾向があるし、胆嚢を採ってしまえば癌の不安もなくなるからです。現在広く普及した腹腔鏡的胆嚢摘出術であれば傷も小さく、手術後もあまり痛くなく、早期に退院できます。当院でも積極的に行っています。しかしながら、胆嚢の炎症がひどい場合や、一度他の病気で開腹歴のある場合、従来の開腹下胆嚢摘出術を行わざるをえません。どちらにせよ手術自体かなり確立されたものですので、危険性はほとんどないといえます。

胆管結石……胆汁の主な通り道である胆管に石がある状態ですが、成因は石の種類によって異なります。胆嚢の石が胆管内へ落下したか、胆管内で形成されたかに大きく分かれます。この場合、胆嚢結石の場合とは違い、無症状でも治療を行ったほうがよいと考えられます。なぜかというと、こういう場合、胆管炎や黄疸などの症状が起きやすく、一度起こった場合重篤になりうるからです。治療としては内視鏡的に石をとる方法と手術で石をとる方法があります。どちらの方法をとるかはケースバイケースです。

2　急性胆嚢炎

胆石を有していて起こす場合が多いが、胆石がなくても起こすことも少ないながらあります。胆嚢管という胆嚢と胆管との間にある管が急性に閉塞するために胆嚢がパンパンにふくらんで起こります。症状は右上腹部の激しい痛みと発熱が主なるものです。検査法はほとんど胆石症と変わりありません。治療法はまず保存的治療（抗生剤の投与、胆嚢ドレナージ術）を行い、炎症がある程度治まったところで、先に述べたどちらかの方法で胆嚢を摘出します。保存的治療で炎症が治まらず症状がひどくなる場合には緊急に手術をします。

3　胆嚢ポリープ

人間ドックや検診で発見されることが多いものですが、大きさ・形などで癌を疑わせるものについては精査を進めていきます。それ以外のものは、超音波検査で定期的にフォローしていけばよいと思います。成因についてははっきりしていません。

4　胆嚢癌

他の癌に比べ発症年齢が高く、有症状にて発見される時はかなり進行していることが多く、予後の悪い癌です。長年に渡る胆石の保有や農薬の暴露などが誘因といわれていますが、はっきりとした原因はわかっていません。いろいろな検査を行って診断がついたら、なるべく手術しますが、姑息的（根治になっていない）な手術になってしまう例もかなりあります。ですから先に述べたように胆嚢ポリープや胆石を指摘された方で癌が疑わしい場合は、早期発見を目指し検査を進めていきます。

以上簡単に述べましたが、これを読んで少しでも気にかかることがある人は一度は病院にかかることをお薦めします。